

「地域に人呼ぶ財産」

二〇〇九年六月に自治会や商工関係者などでつくる地元協議会が示した「地域の人々が活用でき「生きた施設」として複製保全する」との方針に基づいているという。

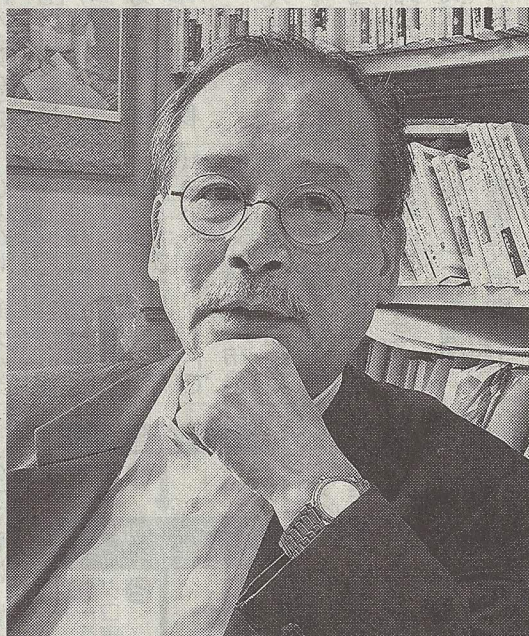
現在、丸いベンチや屋根飾りなど一部を、市の出張所の小スペースに展示保存することが決まっているが、複製保全については地元協議会の要望を受け、市の担当者は「JR側と検討している」と繰り返すのみ。

複製保全の中身あいま

この複製保全の中身も駅舎の外観をどこで、どう再現するかなどあいまいだ。地域で保存運動を続ける美容師の蒔田加代さん(五三)は「協議会の中では、貴重な財産なので、

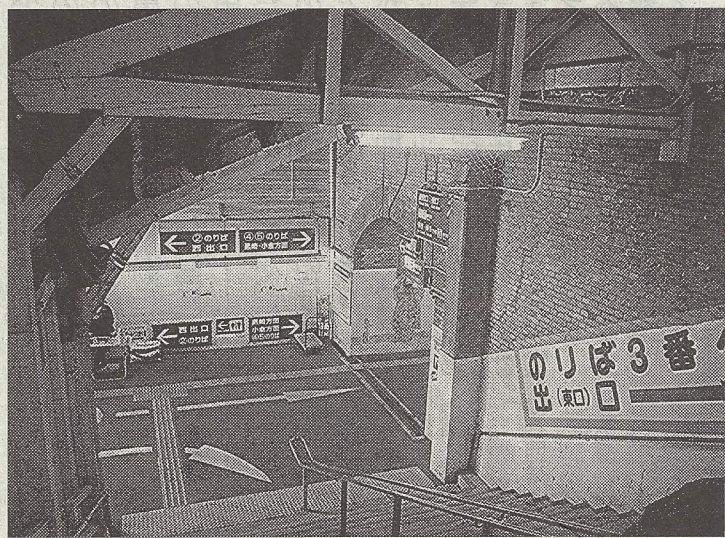
近代の建築物保護を

北九州市文化財保護審議会の委員で、九州国際大の清水憲一教授は「駅舎のペー、国指定の文化財になりうる」と強調する。



九州国際大 清水憲一教授

「少なくとも国の登録文化財になりうる」と折尾駅を惜しむ清水憲一氏(北九州市)



赤れんがの連絡通路

ていない。決まっているのは解体だけ」と不信感を募らせる。

近くの直方駅(福岡県の直方市)が昨秋、住民の訴えにもかかわらず、専門家の調査前日に取り壊されている。蒔田さんは今月二日、市に再び解体前にせめて文化財価値の調査をしよう求めた。

土曜の東京駅丸の内駅舎

市民団体「折尾文化会」の江島勉代表(六三)も「多くの地域が、人を呼ぶ目玉をつくらうとして、折尾にはもうある。目先の公共事業に感わされて、大切な地域の

めっており「世界遺産は、どう地域が支えているかも大事になる。八幡製鉄所をアピールしているときに、筑豊炭田と製鉄所を結ぶルートにあり、非常に価値の高い関連資産をなぜ壊すのか」と疑問視する。

清水教授は、地域活性化の観点からも「駅は地域が発展した証し。地域が元気になる材料でもある。歴史を上手に生かしていくしかない」とし、こう訴える。

「建設工事で遺跡が出てきたら、一時中断して発掘調査を始める。地上にある歴史建築物も守られるべきではないか。国をはじめ文化財行政は埋蔵文化に偏っている。もっと近代の専門家を配して、いたずらに失われる前にきちんと手を打つべきだ」

「国指定」の価値ある

審議会の議論でも再三にわたり調査・保存を求めてきたが、市側は「市内部で検討した結果、調査はしないと」と結論付けた。

昨夏には、産業者古学会(事務局・東京)も北橋健治市長に調査を求める要望書を提出している。市側はこうした専門家の指摘にも耳を傾けなかった。

駅舎の外観を複製保全する案について、清水教授は「世界標準では元にあった場所にそのまま残っていることが重要。移築したモノユメントでは意味がない」と話す。

世界遺産の申請書作成委員も務